泊瀬小国

記紀万葉の世界

和田嘉寿男著

泊瀬小国

記紀万葉の世界

*

和田嘉寿男著

*

*

*

*

*

桜楓社

和田　嘉寿男（わだ　かずお）

1930年、奈良市井上町に生まれる。大阪大学文学部卒業。
現在、武庫川女子大学教授。
著書『大和の万葉』『万葉集の世界』『万葉から古今へ』『全注・大和の万葉歌』『山の辺の道』『大和三山』など。
現住所、奈良市藤の木台3-29-6

泊瀬小国 記紀万葉の世界

平成三年十月二十五日　初版印刷
平成三年十月三十一日　初版発行

著　者　© 和田　嘉寿男
発行者　坂倉　良一
印刷所　株式会社ゲンダイ

株式会社　桜楓社
東京都千代田区猿楽町一―三―一
TEL　〇三―三二九五―八七七四
振替　東京　六―一八〇二〇

Printed in Japan　検印省略
ISBN4-273-02558-2　C0092

造本には充分注意しておりますが，落丁・乱丁などございましたら，発行所かお買上げの書店にておとりかえします。

泊瀬小国目次

泊瀬小国序説
泊瀬の結婚……6
八千矛神の神語……15
雄略御製歌と妻覓ぎ説話……23
客神と赤猪子……31
泊瀬川
泊瀬の川ぼめ……46
こもりと再生と……58
泊瀬の鵜飼……67
七夕――常世への道……75
泊瀬山
泊瀬の山ぼめ……90

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

高山の巌の上に——石田王挽歌……101
山の際にいさよふ雲……110
斎槻が下にわが隠せる妻……119

泊瀬と黄泉の国・常世の国

真木立つ荒山道……136
忍坂——阿騎野への道……146
倉橋と墨坂……157
熊野から宇陀・泊瀬へ……169
泊瀬の雪—あとがきにかえて—　185
引用歌索引　190

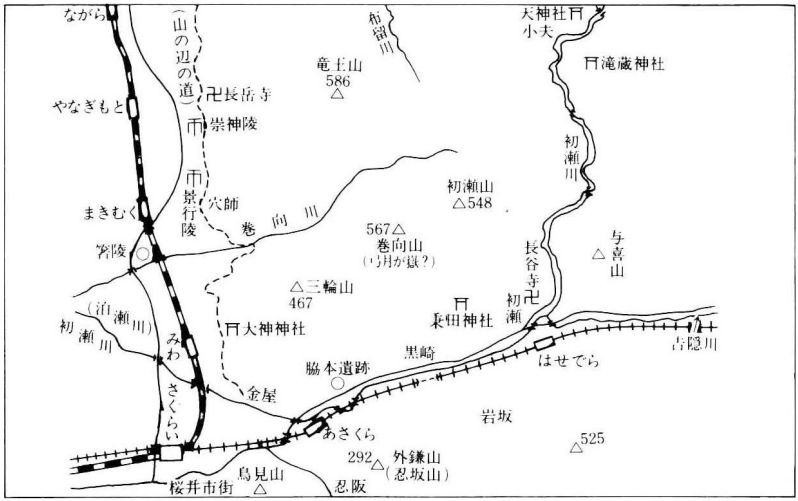
泊瀬小国序説

泊瀬の結婚

泊瀬には「こもりくの」の枕詞がつく。

こもりくの　泊瀬の国に　さ結婚に　わが来れば　たな曇り　雪は降り来　さ曇り　雨は降り来　野つ鳥　雉はとよみ　家つ鳥　鶏も鳴く　さ夜は明け　この夜は明けぬ　入りてかつ寝む　この戸開かせ　（十三・三三一〇）

泊瀬は三輪山の南の麓を、東に細長く入りこんだ袋地である。三輪山の向かいは忍坂の山、今で言えば外鎌山だが、この二つの山の間を東に分けて入ると、平地がなくなって山になる。観音で知られた長谷寺はこの谷間の行きづまりにあるのだが、正確に言えば、行きづまりというのも正しくない。この谷間を分けて流れるのは泊瀬川（初瀬川）だが、この川は長谷寺の



門前で二つに分かれて、更に奥へとのびるのである。それらの谷間にもわずかばかりの平地があり、流れに沿うては小さな集落が谷にとりつくようにひしめいている。一つは門前から北に折れて山の辺の山々の裏側にまわるこの川の本流だが、ここには滝倉（たきのくら）とか小夫（おうぶ）とかいう村里がある。もう一つは泊瀬の谷を更に東にのびて、吉隠（よなばり）を過ぎて西峠に至る支流だが、ここまでくれば、大和ももう泊瀬ではなくて宇陀に近い。

けれども、こういうのは泊瀬の谷を入口から奥へ奥へとたどった言い方で、これを逆に奥からみれば、こういうことになるだろう。大和の東の山々に発した幾条もの流れが集まって一つになり、それが狭い泊瀬の谷間を流

れ下って、漸く広々とした国原に出る。谷間といっても、それはいくばくかの平地をもつ泊瀬の国である。そして、その出口の北側にあたって長く裾を引くのが、あの神体山の三輪山なのだ。泊瀬の谷は、この三輪山によってその入口を守られていると言ってもよい。その入口は昔の海石榴市、今の桜井市の金屋であり、谷間の奥は長谷寺の門前である桜井市の初瀬町である。海石榴市は昔、山の辺の道の南の起点であった。

泊瀬がとる「こもりくの」の枕詞は、こういうこの地の形状と無関係ではない。万葉集に泊瀬の名を詠みこむ歌は三十四首であるが、うち十九首がこの枕詞をとる。それは大半、「隠口」と書かれているが、これをコモリクとよむのは「己母理久」と書かれたもののあることからも知られるのである。そのコモリクのクとは、おおかたの説のように、イヅク(何処)などのクと同じく「処」であろう。つまりコモリクとはこもった処、もっとはっきり言えば山間にこもったところ、まわりを山々に囲まれたところの意である。そして、それが長い谷の形をとるがゆえに、長谷と書いてハツセ(ハセ)とよんだりするのである。だが、山々にこもるのは、単に土地のみであろうか。そこには何か、神霊のようなものもこもっているような気がする。黄泉の国や常世の国に通う精霊のようなものと言ってもよい。そしてそれは、この谷の入口に裾を引く三輪山にもかかわるような気がするのである。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.

泊瀬はまた、「小国」であるという。

こもりくの　泊瀬小国に　妻しあれば　石は履めども　なほし来にけり（一三・三三一一）

これは先にあげた長歌の反歌である。泊瀬に妻がいるから石を踏む苦労をしてもやはりやって来たという男の歌だが、ここで泊瀬を「小国」といったのは、これもおおかたの見方のように、この地に寄せる親しみの気持であろう。「小」とは小さいものに対する愛称だという。だが、そういってすませてしまうにはもの足りない何かがあるような気もする。ここにも何か呪的な祈りがこめられているのではなかろうか。さかのぼれば、それは親しみよりもむしろ畏れに源をもつような気もするのである。小さなものに抱く畏怖の気持と言ってもよい。[1]

最初の歌は万葉集巻十三、問答の部に収められた男の歌である。問答の「問」にあたるが、だから当然、あとには女の「答」歌がつづく。それはともかく、歌の大意はこうである。――泊瀬の国に妻問いに来ると、空が曇って雪や雨が降ってくる。おまけに雉や鶏も鳴いて、もう夜も明けそうだ。せめてちょっとは共寝をしたい、だからこの戸を開けてください――

今の世ではとっくに消えてしまった素朴な味わいもあって、しみじみ美しい。「たな曇り雪は降り来、さ曇り雨は降り来」というのは反歌の「石は履めども」などと同じで、そういう悪い条件の中でもやってきたという効果をねらっての表現だろうが、一方、泊瀬にもよく合っている。山にこもったこの地では、事実、雪や雨も降りやすい。陰鬱な空模様は、黄泉にも通うというこの地にもかなっている。けれども、理屈を言えばちょっとおかしくはないか。男はいったい、どこから来たのだろう。当時の生活圏は、そう広くはない。いずれ近くのあたりだろうが、天気はともかく、それならよりによって夜の明けそうなころに来ることはないのである。あとの女の歌からすれば、そういう時間にこっそり来るよりなかったともとれるが、普通は日の暮れるころに女の家につくのが当時の妻問いの一般であった。

けれども、この疑問はしばらくおいて先へ進もう。このような男の歌――「入りてかつ寝む、この戸開かせ」という男の訴えに対して、女は次のように答えている。

こもりくの　泊瀬小国に　夜延せす　わが天皇よ　奥床に　母は寝たり　外床に　父は寝たり　起き立たば　母知りぬべし　出で行かば　父知りぬべし　ぬばたまの　夜は明け行きぬ　ここだくも　思ふごとならぬ　隠妻かも　（十三・三三一二）

これにも反歌がついていて、

川の瀬の　石踏み渡り　ぬばたまの　黒馬（くろま）の来る夜は　常にあらぬかも（十三・三三一三）

川瀬の石をふみ渡ってあなたの乗る黒馬は毎夜来てくれぬものか――とつづくのだが、これは男の歌の反歌と同じく、あとからつけ加えたものであろう。[2] 反歌つきの歌をやりとりするというのは、実際に照らしても考えがたい。

この女の歌も、やはりしみじみ美しい。雪や雨の降る夜明けにほとほとと戸を叩く。それにこたえて開けてあげたいのはやまやまだが、「奥床に母は寝たり、外床に父は寝たり」[3]――起きていったら母や父に知れてしまう、だからじっと息をつめて胸をいためている、そういう女の姿を思い描くとそれは素朴で美しいが、この女は、実は「隠妻」であるという。「隠妻」とは人目をはばかる妻、世間に公表できない妻のことだが、やはり暗いのである。この語の用例は集中に八例、うち泊瀬の地名とともに詠みこまれたのはこの歌だけだから、それだけみれば決して多いとは言えないが、そのほかにも、たとえば、

泊瀬の　斎槻が下に　わが隠せる妻　あかねさし　照れる月夜に　人見てむかも

（十一・二三五三）

などいう歌の「隠せる妻」も、結局は隠妻であろう。泊瀬の恋の歌は、どうも暗いのである。そういえば、反歌には男の乗る馬は「黒馬」だという。雪や雨の降る夜にしのんでやってくる男が馬に乗っていようとは思われないし、いずれあとからつけ加えた歌ならどうでもいいのだが、それにしてもなぜ黒馬でなければならないのか。夜の馬の意を兼ねたものかとの注釈もあるが、そうでなくとも泊瀬のイメージにはかなうのである。

だが、それ以上に不審なのは、女のもとにやってきたのは、実は天皇であるということだ。「こもりくの泊瀬小国に夜延せすわが天皇よ」というから、天皇がヨバヒにやってきたというのである。これは現実にはあり得ないことであるから、古注ではこの部分（原文は「吾天皇寸」）を「吾夫寸美」とか「吾夫寸三」の誤りとしてワガセノキミ（わが夫の君）とよんだ。あるいはそのままスメロキとよむにしても、「人を貴みいふにも限こそあれ、女が己が夫をいとも恐く天皇といへること、かりにも有べしと思へるにや。身もわな、かれて恐し」（万葉考）

泊瀬小国　―朝倉台から黒崎の集落をみる―

と慨嘆する始末である。だが、現にスメロキとあるのだからしかたがない。けれども、そのスメロキとは、実はオオキミ(大君)とは別なのである。「やすみししわが大君」などいう時の「大君」は今の世の天皇をいう。対してスメロキとは皇統譜に位置づけられた天皇、歴史的に抽象化された天皇である。今の世に、現に皇位にある天皇ではないのである。それにしても真淵の心からすれば「身もわな、かれて恐し」いことに変わりはないだろうが、こうみてくると、この泊瀬の妻問いは、どうやら特定の男女の特定の場でのやりとりではないらしい。これは天皇を主人公としての、フィクションである。フィクションならばよりによって夜明けに来ることもないといった

不合理も解決がつく。雪や雨という悪条件を、効果をねらっての表現と書いたのもそういう前提に立ってのことだったのである。

天皇を主人公としたフィクションとすると、まず思いつくのは万葉集の巻頭にある雄略天皇の歌だろう。ここで雄略は、菜摘みの乙女に名を聞いている。名を聞くのは求婚である。ヨバヒというのは「夜這ひ」、つまり手探りで這うようにして異性に近づくことだとする説もあるが、やはりこれは通説のように「呼ばひ」であって、相手を呼びつづけることというのが転じて求婚の意になったものであろう。[4] そうとすれば、記紀の中には雄略の求婚の話も多い。おまけに雄略は泊瀬の朝倉に都した。それなら、泊瀬の妻問いのこの問答歌は、雄略の妻問いの物語に深く結びついていることに、ほぼ間違いはない。

でも、それだけだろうか。この歌には、実は、次に述べる高志の沼河比売に妻問うたという八千矛神の神話も影をおとしているのである。八千矛神とは大国主神だが、その大国主神は泊瀬の谷の入口に尾裾を引く神体山の三輪山とも結びつく。この歌にスメロキが出てくるのは、単に雄略が泊瀬の朝倉に都して、その雄略には求婚の話が多かったからだ、だけではすまされない。

泊瀬の恋の歌には、ほかにも遠い世の物語を重ね合わせたものが多い。それらの恋の歌が

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.